『國民新報』1940年11月13日

[主張]　新體制の倫理

はとなつた。とはか。それは、、つてにはのをして八紘一のをりげるためにをにすることである。

しからばにいては、はなるにるべきであるか、それはをすてゝ、をににげることであり、、をてゝをのためののためにぜしめることである。

『が』とか『の』とかいふへに『わがが』『わがの』をせしめねばならない。

これはしてでもでもない。りさうなのだ。えばをしてもののためにやつてはならない。

はのための一であつて、それはのためであり、のためでなければならない。

もさうではののためとつてはならない。それはのにはない。はびのののためである。、、なるでもさうである。

とは、をのためにすることであるから、はももであり、[は]のでもである。のはがから一おかりしてゐるのであつて、なんどきでもがとならばげねばならない。

ばかりではない、のもさうである。のはのではない。からおかりしたすめらのである。

のであり、のである。わがをわがとふことはであり、である。わがをににてげて、にげる、これがののである。からずがされるであらうが、わがのはわがなりなどとつてはならない。がにされた、わががそののでに[な]るとしたら、それこそ、にしたてまつり、ないことである。

にわがのことであるが、われもわがではない。時おしがらうと、をせからうと、とびをて、これにじたてまつらねばならない。一のはでありである。

のにあるわれわれは、かういふでなければならない。かくしてこそ、われわれはのをしたてまつるのである。